



Data

監督・脚本：フルーツ・チャン
プロデューサー：アンディ・ラウ
出演：サム・リー／ネイキー・イム
／ウエンダース・リー／エイ
ミー・タム

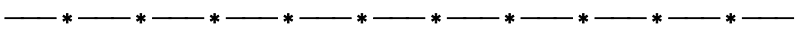
👁️👁️ みどころ

返還から20年を経た現在の香港では「一国二制度」が大きく揺らぎ、若者たちが求める「民主主義」も危機に陥っている。しかし、返還に沸く1997年当時の、香港の若者（チンピラ？）たちの生きざまと純愛は・・・？

フルーツ・チャン監督が「香港返還三部作」として、若者たちの生きざまと純愛を瑞々しくかつ斬新な映像で切り取った本作が、リマスター版として復活！こりゃ、必見だ！

『ロミオとジュリエット』はもちろん、『ウエストサイド物語』（61年）や『牯嶺街（クーリンチェ）少年殺人事件』（91年）等と対比しながら、ごった煮状態下での純愛の展開と、その悲しい結末を確認したい。

主人公たちの生きざまと死にざまは本作で確認できたが、成年になった香港という国自体の今の生きざまは如何に・・・？



■□■フルーツ・チャンの「あの名作」がリマスター版で！■□■

私は香港のフルーツ・チャン監督の『ハリウッド★ホンコン』（01年）を2003年12月に観たが、そこではヒロインの東東、紅紅、芳芳を演じた、中国四大女優（四小名旦）の1人である周迅にばかり目が奪われていた（『シネマ5』286頁）。また、私はそれ以前にフルーツ・チャン監督の『ドリアンドリアン』（00年）を観ていたので、同監督の本作は是非観たかったもの。それが今回4Kレストア・デジタルリマスター版で蘇ったと聞き、こりゃ必見！

■舞台は返還直前の香港！そこでの若者の生きざまは？■

2001年香港金豆賞の主演女優賞／最優秀脚本賞、香港映画アワードの最優秀新人賞／最優秀脚本賞、HKFC Sアワードの最優秀主演女優賞を受賞した本作は、香港が99年ぶりに中国に返還されるという1997年の時代状況の中で作られた「香港返還三部作」のひとつ。その1997年に私は香港旅行に出かけたから、本作に描かれている香港の超高層ビルを中心としたまちの事情と、そこに住む庶民の暮らしぶりはよくわかる。

もともと、当時の香港の教育事情は全くわからないから、本作冒頭にナレーションで語られる、中学校を中退し、ウィン兄貴の借金の取り立てを手伝っている青年・チャウ（サム・リー）の教育レベルはよくわからない。また、チャウが借金の取り立てに行く中で恋仲になる16歳の魅力的な女の子・ペン（ネイキー・イム）も、処女だと言いながら借金の棒引きのためにチャウを誘惑したり、チャウが面倒を見ている弟分・知的障がい者のロン（ウエンダース・リー）のためにスカートをめくって見せてやったり、その知的レベルはよくわからない。

しかし、1959年生まれのフルーツ・チャン監督が本作の脚本を書き、監督したのは38歳の時だから、本作はとにかく若さがいっぱい。本作冒頭の飛び降り自殺のシーンに登場する女子学生・サン（エイミー・タム）の映像をはじめ、フルーツ・チャン監督が本作で見せてくれる映像は斬新さに溢れている。また、チャウの行動は実に危なっかしいものの、疾走感でいっぱい。さらに、意外にも借金の取り立てを手伝っているチャウの言いつには、かなりの正義感も・・・。

■返還直前の香港では“純愛”もごった煮状態に！■

本作のストーリーの発端になるのは、サンが残した血で染まった2通の「遺書」。その遺書をロンが拾ったため、チャウはロンとペンを連れて遺書をその宛先まで届けに行くことに。サンの恋人である体育教師に宛てた1通目の遺書は読まれないまま破り捨てられてしまったが、2通目の両親宛ての遺書を届けるところから本格的なストーリーが展開していくことになる。

こんなボランティア活動(?)に精を出す3人の若者の姿は万国共通で微笑ましいが、そんな活動の途中で、ペンが腎臓病に冒されており移植手術ができなければ余命わずかだということがわかると、俄然チャウとペンの恋仲は深まっていくことに・・・。「難病モノ」はその後、行定勲監督の『世界の中心で、愛を叫ぶ』(04年)が大ヒットしたが、本土への返還に沸く1997年の香港にもこんな「難病モノ」があったわけだ。もともと、そんな時代状況の中でフルーツ・チャン監督が描く純愛は『世界の中心で、愛を叫ぶ』のような悲しくもピュアな純愛ものではなく、①チャウの母親の家出あり、②ウィン兄貴の命令による、チャウによる拳銃を使つての“殺し”あり、③逆に、そのことで殺害指令が出され

たチャウの刺殺事件あり、と様々な事件のごった煮状態の純愛だ。

さらに、①でつきりチャウが腹を刺されて死んでしまったと思ったペンはチャウのベッドの側で死んでしまうし、②ロンもヤクの運び屋をさせられる中、ちょっとした事件で殺されてしまう、から、何とか死の淵からの生還を果たしたチャウも絶望状態に。しかして、香港が中国に返還された後香港がどんな生き方をしようが、それは俺には関係がない、とばかりに、ある日チャウは・・・？

■□■チンピラだって本心では・・・？しかし現実は何？■□■

混乱した時代状況の中、社会の底辺で生きる10代の若者たちが「抗争」に明け暮れるのは仕方ない。それは『ウエストサイド物語』(61年)における、ジェット団とシャーク団の抗争に生きた若者や、台湾映画の名作『牯嶺街(クーリンチェ)少年殺人事件』(91年)『シネマ40』58頁)における「小公園」グループと「217」グループとの抗争に生きた若者も全く同じだ。時代や国は違っても、そんな年頃の若者はみんな似たようなものなのだ。若者(チンピラ?)にとって、抗争の中で生き抜くことはある意味で楽しみであり、励みにもなるもの。そして、その中では必ず純愛も登場する。しかし、『ウエストサイド物語』でも『牯嶺街(クーリンチェ)少年殺人事件』でも、恋する若い男女を待ち受けているのは、なぜか『ロミオとジュリエット』と同じような悲劇ばかり。しかして、本作におけるチャウとペンの純愛の行方は？

本作の主人公チャウが『ウエストサイド物語』や『牯嶺街(クーリンチェ)少年殺人事件』の主人公たちと根本的に違うのは、組織を嫌う孤独な男であること。その点では、年代は違うが「あっしには関わり合いのないことでござんす」がログセだった木枯し紋次郎によく似ているが、チャウは決して木枯し紋次郎のようにニヒルではない。ヤクザの使い走りをしている、アホで孤独そして意外に純情な青年は、私が中学生の時に大好きだった映画『泥だらけの純情』(63年)で、浜田光夫が演じたチンピラも同じ。何と彼は、分不相応にも、吉永小百合演じる深窓の令嬢と恋に落ちてしまったから、その先に悲劇が待ち受けていたのは当然だが、チャウの場合は、恋に落ちた美少女ペンの育ちもガラの悪さも似たようなものだから、意外にいいカップル。私にはそう思えたが、ペンの母親はヤクザの使い走りをするチャウをトコトン嫌っていたから、そんな2人の純愛を成就させるのは大変だ。チンピラのチャウだって、本当は真っ当に生き、真っ当に純愛を成就させたいのが本心だが、返還直前の香港は前述のようなごった煮状態だったから、結局チャウとペンの純愛も悲恋物語になっていくことに・・・。

■□■返還から20年！今の香港は？今後の生きザマは？■□■

1989年の天安門事件(「六四事件」)で、歌手のテレサ・テンが演じたジャンヌダルク的役割は、今でも語り草になっている。また、この評論を書いている4月14日(土)

の日経新聞の「この一冊」には、余傑著、劉燕子編『劉曉波伝』が取り上げられ、ここでは「本書を繙けば、天安門事件前後から習近平時代に至るまで、民主と自由のために闘ってきた代表的な体制外知識人の生き様を感得できる。」と紹介されている。本作に見たチャウは、冒頭から中盤にかけては、チンピラとはいえ威勢がよく元気いっぱいだったが、ペンとの純愛に落ちてからは、意外にも真面目さと正義感が前面に出てくることに。しかし、その結末は悲しいものになったから、映画としてはよくできていても、『ロミオとジュリエット』と同じく、結局は悲しい物語になってしまった。

他方、イギリスの植民地だった香港が中国に返還されたのは、鄧小平の努力によるところが大きい、それは素晴らしいこと。その返還については、民主主義と一党独裁との間を取り持つ工夫として「一国二制度」が採用され、今日まで20年間それなりにうまく運用されてきた。しかし、今年3月11日に行われた香港の立法委員補選では、そこに立候補しようとした新たなジャンヌダルクである周庭が立候補できなかったばかりか、民主派の「香港衆志（デモシスト）」が議席を減らし、本土派が議席を増大させた。2014年に大きな盛り上がりを見せた「中環占拠」や「香港反政府デモ」等に見た、いわゆる「雨傘運動」は急速にしぼんでしまったわけだ。

そんな香港の現状を考えると、香港という国の民主主義はどうなるの？周庭が立候補を諦めたことに象徴されるように、そしてまた、純愛を貫いた結果チャウやペンたちが死んでしまったように、香港の民主主義も死んでしまうの？香港返還から20年、フルーツ・チャン監督の本作のリマスター版を観ながら、あらためてそのタイトル通り、「メイド・イン・ホンコン（香港製造）」はどうあるべきなのかを、しっかり考えたい。

2018（平成30）年4月14日記